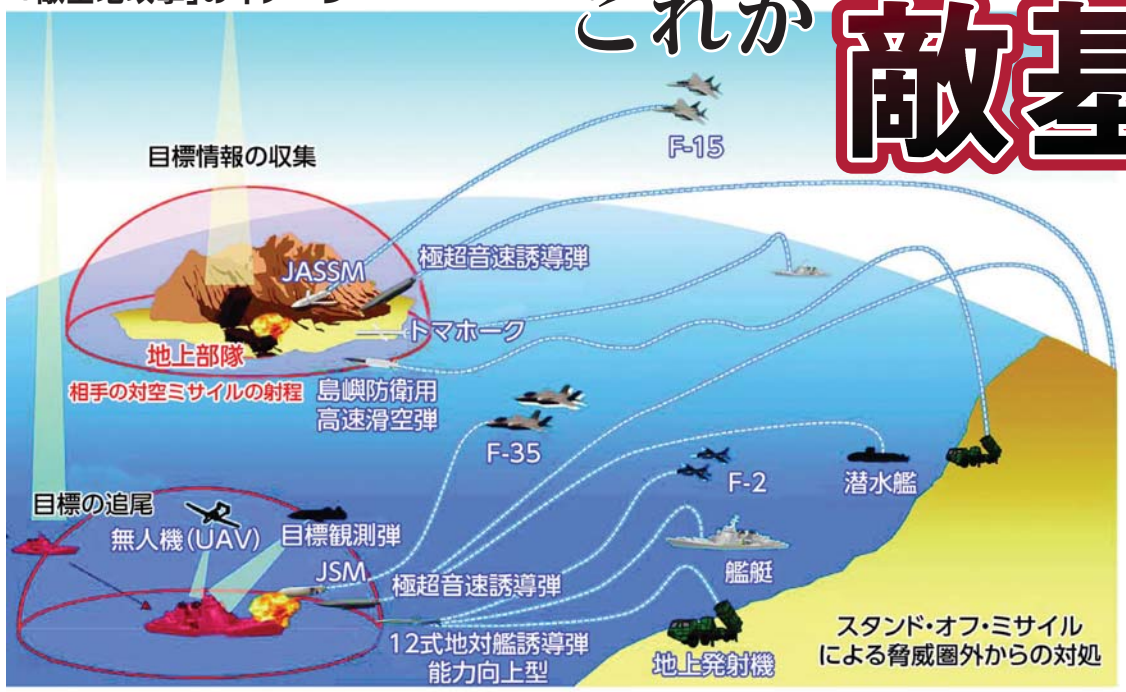
これが 敵基地攻撃能力

「専守防衛」どころか〝日本が脅威の存在〟に

特集 すいよう

５年間で43兆円。岸田政権は文教予算の２倍もの軍事費を費やして、大量の兵器を購入しようとしています。〝日本が攻撃を受けた際の「反撃能力」だ〟などと称していますが、とんでもありません。政府の「兵器リスト」には、日本が攻撃を受けていないのに、他国の領域まで踏み込んで攻撃する「敵基地攻撃」兵器がズラリと並んでいます。（竹下岳）

「敵基地攻撃」のイメージ



（防衛省資料から）

戦後初めての「空爆」が可能

一番のカギは、長射程のミサイルです。最初に導入されるのが、米国製の長距離巡航ミサイル・トマホークなど外国製ミサイルです。トマホークは米軍が核弾頭を搭載するために開発し、２０００年代以降はイラクやアフガニスタンなどの先制攻撃戦争で繰り返し使用してきました。防衛省は1回の攻撃で数十発を同時発射する構想です。こんなことをすれば、大量の民間人が巻き添えになってしまいます。

「12式地対艦誘導弾」という艦船を破壊するミサイルも、射程を1000キロ以上に延ばし、護衛艦や戦闘機への配備を計画。対地攻撃への転用も検討しています。

もう一つの問題は、これらのミサイルを搭載するイージス艦、戦闘機を大量配備し、潜水艦からも発射しようとしていることです。日本の領域内にとどまらず、相手国の近くまで移動して攻撃が可能になります。日本は戦後初めて「空爆」が可能になります。

極超音速高速滑空弾（米レイセオン社）

迎撃不可能な〝最悪の兵器〟

その先には、さらにおそろしい計画が待っています。「極超音速兵器」と呼ばれるミサイルの保有です。

トマホークの飛しょう速度は音速の4分の3程度ですが、極超音速兵器は音速の5倍（時速約6120キロ）以上。射程は2000～3000キロに達し、軌道も自在に変えることができるため、既存のミサイル防衛網では迎撃不可能とされます。まさに最強・最悪の兵器です。

これら一連の兵器が、「敵基地攻撃能力」（反撃能力）の正体です。どこが「専守防衛」なのでしょうか。

極超音速兵器は中国やロシアが既に配備し、米軍も開発を急いでいます。政府は「国家安全保障戦略」で、極超音速兵器を例示し、「既存のミサイル防衛網だけで完全に対応することが難しくなりつつある」と説明。だから「反撃能力」＝攻撃される前に相手の基地をたたく能力を持つのだとしています。

「中国やロシアがこの兵器を持つことは脅威で、日本が持つことは脅威でないとどうして言えるのか」。日本共産党の志位和夫委員長はズバリ、岸田文雄首相を追及した（1月31日、衆院予算委）。首相は答弁不能となりました。

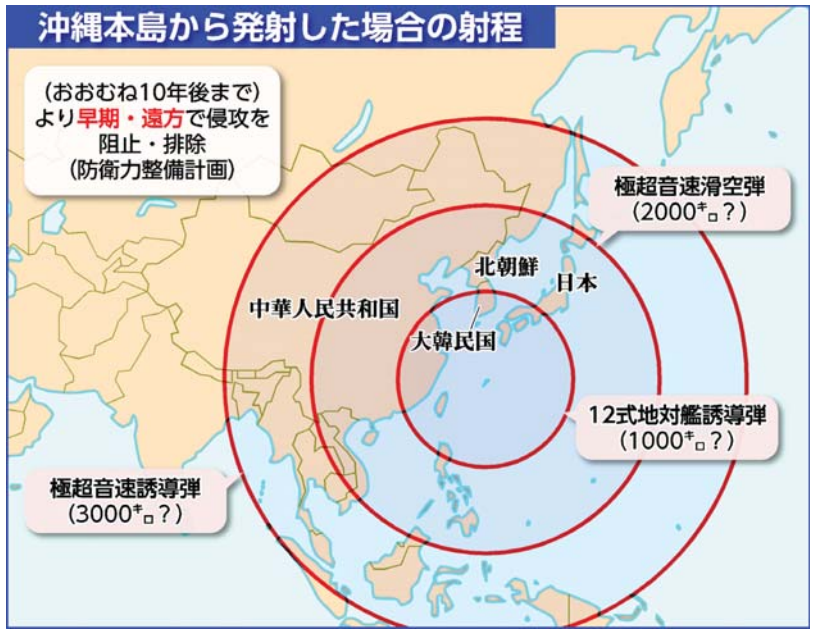
軍拡の悪循環 最後は核武装

現代の戦争は「ミサイル戦争」の様相です。

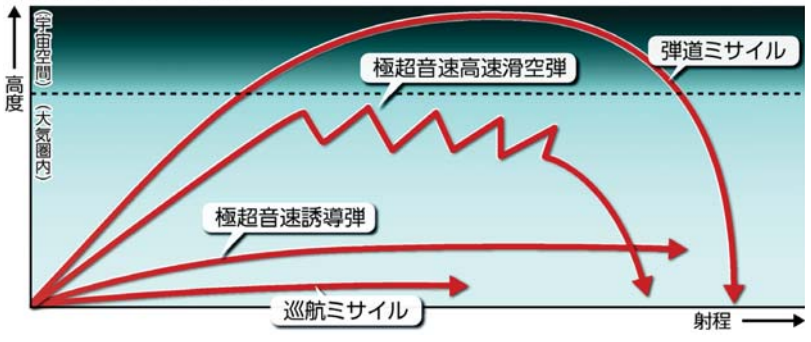
米ソの核ミサイル競争、米国と同盟国による「ミサイル防衛」網の構築、さらに中ロがこれを突破するために極超音速兵器を配備し、日米も同じ兵器で対抗する―。日本は「盾」（防御）だけでなく「矛」（敵基地攻撃能力）で、米主導のミサイル戦争に参戦しようとしているのです。

果てしなきミサイル軍拡競争を繰り返せば、いずれは核武装論に行き着かざるをえません。こんな未来を招かないために、「岸田大軍拡」を止めることが、今を生きる私たちの責任です。

沖縄本島から発射した場合の射程



長射程ミサイルの飛び方



導入するスタンド・オフ・ミサイル（長射程ミサイル）

国産（いずれも研究・開発中）

12式地対艦誘導弾能力向上型／1000キロ以上

地上だけでなく艦船、戦闘機（F2戦闘機）にも搭載・2026年度以降の配備目指す

極超音速高速滑空弾／2000キロ？
（島嶼防衛用高速滑空弾・能力向上型）

高高度を上下動しながら滑空し、マッハ５以上で落下・攻撃。配備時期未定

極超音速誘導弾／3000キロ？

スクラム・ジェットエンジンを搭載。低高度をマッハ５以上で飛行。誘導で軌道も自在に。配備時期は未定

輸入

トマホーク／1600キロ

米国製の長距離巡航ミサイル。イラク、アフガニスタンなど米の先制攻撃戦争で使用。23年度予算案に購入費を計上

ＪＳＭ／500キロ

ノルウェー製の空対地、空対艦ミサイル。納入され次第、Ｆ35Ａステルス戦闘機に搭載

ＪＡＳＳＭ／900キロ

米国製の空対地ミサイル。Ｆ15戦闘機の改修完了後、搭載。23年度予算案に取得費を初計上

読者の広場　学問・文化　くらし・家庭　すいよう特集　日曜　月曜　火曜　水曜　木曜　金曜　土曜　テレビ・ラジオ　文化の話題　くらしワイド
創刊 95年 しんぶん赤旗

レイアウト・下渕雅史